

‘きぬむすめ’に縞葉枯病が発生すると発病茎率が減収率となる

資源環境研究部 病虫グループ 磯田 淳・塚本俊秀

平成20年（2008年）に島根県の中～東部の平坦部でイネ縞葉枯病が突然多発生し、特に‘きぬむすめ’で大きな被害となりました。平成21年には、ほぼ県内全域で発生が確認されましたが被害はわずかでした。‘きぬむすめ’は平成17年に奨励品種に採用された新しい品種であり、また、被害も大きかったことから減収について調査しました。



図1 縞葉枯病多発生圃場

○結果の概要

縞葉枯病が発生した圃場を観察すると、発病茎では穂が出すくみ状態になったり、出穂しても不稔となっていることから発病茎率と減収率との間に関係があるものと考えられました。そこで、縞葉枯病の発生している‘きぬむすめ’栽培圃場内の4か所で株ごとに茎数、縞葉枯病の発病茎数を調

査し、発病茎率により5段階（0%、～10%、～33.3%、～66.6%、～100%）に分け、それぞれ50株ずつ刈り取りました。乾燥後に脱穀調整し精玄米重（粒厚1.85mm以上、15%水分換算）を調査し、50株の発病茎率と精玄米重との相関を求めました。その結果、発病茎率（x）と精玄米重（y）から $y = -17.9x + 1865.9$ の相関式が得られました。（図2）この相関式を用いて発病茎率（x）と減収率（y）との関係を求めると $y = 0.96x$ となり、発病茎率の数値がほぼ減収率となる（減収率（%）≒発病茎率（%））と考えられました。（図3）

○おわりに

縞葉枯病は縞葉枯病ウイルスによって発病し、このウイルスはヒメトビウンカによって媒介されます。近年、西日本で突発的に縞葉枯病が多発生している事例がありますが、その主要な要因はウイルスの保毒虫率の高いヒメトビウンカの多飛来によるものと考えられています。現在、縞葉枯病に直接効果のある防除方法はありません。ウイルスの媒介虫であるヒメトビウンカを適切に防除して圃場内で発病が広がらないようにすることが被害を抑えるために極めて重要です。

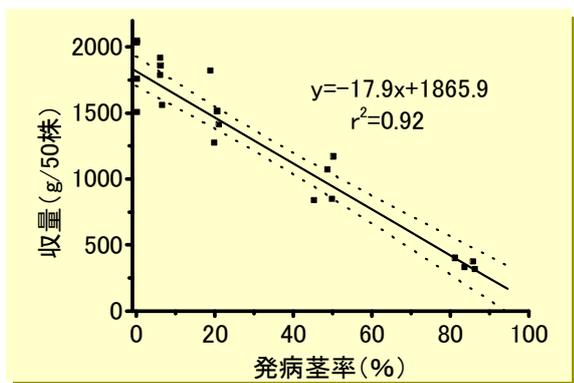


図2 縞葉枯病の発病茎率と収量

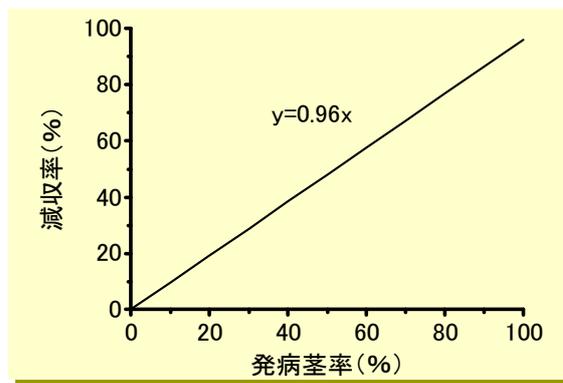


図3 縞葉枯病の発病茎率と減収率